

博士学位請求論文審査報告書

申請者 飯田巳貴
論文題目 近世のヴェネツィア共和国とオスマン帝国間の絹織物交易

1. 論文の主題と構成

地中海は、古くから周辺地域を政治・経済・文化等様々な形で結びつけてきた。中世中期になると、イタリア半島の海洋都市国家が地中海交易に進出し、地中海地域内の交流が活発化した。ヴェネツィアをはじめとする海洋都市国家の商人は、東地中海地域のビザンツ帝国やイスラーム支配地域との交易を通じて繁栄し、その経済効果はイタリア半島北部の内陸にも及んだことは、これまで多くの研究によって実証されてきた。

従来の研究では、イタリアと東地中海を結ぶ地中海地域内交易は 15-16 世紀を頂点としてその後急速に不可逆な衰退に陥り、イタリア半島の都市国家にかわって、アルプス以北の北西欧諸国が地中海交易を含むヨーロッパ経済世界の覇権を握ったと考えられている。

本論文はこの通説を批判し、中世後期から近世にかけて（16・17 世紀）の時代にあっても、東地中海を介したヴェネツィアを中心としたイタリア都市国家とオスマン帝国との間には豊かな交易関係があったことを実証するために執筆された。後述する本論文の構成における「問題提起」「先行研究」「史料について」「課題と構成」のなかで述べられている著者の主張によると、これまで上記のような誤った通説が流布したのは、大略、次の二つの理由のためであるという。

第一は資料上の理由であって、この時期の東地中海の交流史研究では、言語一つとっても、ヨーロッパ諸語のほかトルコ語、アラビア語の東方諸言語の習得を必要とするのみならず、本論文が扱うイタリア都市国家とオスマン帝国との間の商業史を取り上げるならば、イタリア都市国家とオスマン帝国の間における経済事情や経済政策の違いを反映して資料の残存状況が大きく異なっているため、両地域をともに視野に収めた研究が困難だからである。第二は理論上の理由であって、経済史研究の主流が生産を重視し、交易においても大規模な取引がなされる日常品の研究に傾きがちなか、当該テーマでの交易は高級絹織物を中心とした奢侈品貿易であり、その経済的価値が不当に軽視されてきたからである。

この二つの研究上の困難にたいして、著者は、第一の資料上の理由については徹底的な資料考証によって、第二の理論上の理由については流通と奢侈品の経済学を唱道することによって克服しようと試みた。

具体的には、一方では 17 世紀前半にオスマン帝国で作成された公定価格（ナルフ）台帳、他方では 16 世紀末から 17 世紀初めにかけてヴェネツィアで作成された海上保険契約書史料という異なる性格の資料を吟味、分析することによって、オスマン帝国とヴェネツィア

共和国との間の絹織物貿易を出来る限り数量的に把握することに努めるとともに、貿易事情を数量的に把握することの資料的な困難性を克服するために、文化史の文献に着目して、中世後期から近世にかけて東地中海を挟んだオスマン帝国とヴェネツィアを中心としたイタリア都市国家との間の商業関係の背景に、中世のビザンツ帝国から引き継がれ、オスマン帝国とヴェネツィア共和国が共有した奢侈品消費文化の存在を定性的に確かめた。その結果、消費文化の共有を背景に、中世後期から近世にかけて、東地中海が大きな奢侈品市場として機能したことが実証的に示された。

本論文の構成を述べれば、以下のとおりである。

問題提起

先行研究

史料について

課題と構成

第1章 イスタンプルの宮廷および都市社会における絹織物の役割

第2章 17世紀前半のイスタンプル公定価格（ナルフ）台帳からみる絹織物消費市場

1. 17世紀前半のイスタンプル公定価格（ナルフ）台帳からみる、絹織物消費市場
2. 1624年ブルサ台帳との比較
3. ヴェネツィア製繊維製品の位置づけ

第3章 16世紀末から17世紀初めのヴェネツィアとオスマン帝国間の絹織物貿易

1. 15世紀末までのヴェネツィア絹織物産業と東地中海地域への絹織物輸出
2. 16世紀末から17世紀初頭における、ヴェネツィアとオスマン帝国の輸出入貿易

結論

資料編

参考文献

図表一覧

2. 各章の概要

本論文は三つの章から構成される。第1章では、主に先行研究に依拠して、イスタンプルを中心としたオスマン帝国社会における奢侈品消費のありかた、そのなかで絹織物が果たした役割が概観される。オスマン帝国では毎週の君主の行列や各種の祝祭、宮廷行事等に莫大な費用をかけた。顕示的消費は単なる個人的な贅沢ではなく、帝国の威容と富を帝

国内外に知らしめ、それによって支配の正当性を認識させる事を目的とした政治的に不可欠な舞台装置であり、そのなかで、古来より富のイメージと深く結びついてきた絹織物は、衣服、敷物、贈答品等の贈与慣行で重要な役割を担った。帝都イスタンブルでは、絹織物は大バザールのベデステンを中心に商われ、歴代のスルタンや高官がワクフ（宗教寄進）に設定したベデステンやハーン、絹織物や繊維製品の名前をもつ小道が大バザールの内外に開かれた。

第2章では、17世紀前半にオスマン帝国で作成された3点の公定価格（ナルフ）台帳が分析され、その結果、イスタンブルでは厚地の高級絹織物への言及が最も多く、奢侈品消費への関心の高さが確かめられた。1600年と1640年のイスタンブル台帳を比較すると、後者は記載された絹織物の種類が増加し、17世紀半ばにかけて奢侈品市場の成長が示唆されている。

イスタンブルにおける絹織物の消費傾向は、1624年のブルサ台帳と比較すると一層明確になる。当時のブルサはアナトリアを代表する地方都市であり、商品の集散地でもあった。ブルサのナルフ台帳に見られる絹織物の種類は、イスタンブルに比較すると高級品が少なく、中級・下級品の割合が高い。その背景には、宮廷や高官などの富裕層が集中するイスタンブルと、地方都市との消費文化や経済規模の違いがあったと考えられる。

絹織物の産地は帝国内外に広がっているが、毛織物や綿織物と比較すると、産地の分布が若干西寄り、つまりヨーロッパ寄りであった。16世紀なかば以降のオスマン帝国では、イタリアを主とするヨーロッパ製絹織物の輸入は、帝国財政を揺るがすものとして非難され、その対抗策としてイスタンブルでの高級絹織物製造が振興されてきた。しかし第2章の分析からは、17世紀前半においても、多くのヨーロッパ製（実態はイタリア製が主であると考えられる）、およびヴェネツィアやフィレンツェ等イタリア製の絹織物が、イスタンブルやブルサの市場で、相当の人気を得ていたことが示された。

ナルフ台帳には、中世以来ジェノヴァの支配を受けて絹織物製造の技術が伝えられたキオス製の絹織物の記載も多く見られる。キオス製絹織物の人気は、イタリア製絹織物に対する需要の大きさを裏付けているともいえる。

オスマン帝国で流通し、台帳に記載されたヴェネツィアやフィレンツェの絹織物は高級品にとどまらず、1624年のブルサ台帳、1640年のイスタンブル台帳では、これらの産地の名を付けた薄地絹織物や綿絹交ぜ織りが記載されている。16世紀以降、北イタリア各地の絹織物製造業では、従来の重厚な高級絹織物製造に加えて、比較的安価な軽量（薄地）な絹織物や交ぜ織りが次々と開発されてきた。上記2点の台帳の記載内容は、その成果の現

れであるといえよう。

第3章では、16世紀末から17世紀初めにかけてヴェネツィアで作成された公証人文書(海上保険契約書)を分析し、当時ヴェネツィアの海上貿易では、オスマン帝国市場(イスタンブル、ラゲーザ、イズミル、アレクサンドリア、シリア)はもっぱら毛織物、高級絹織物を中心とした繊維製品の輸出先であったことが確認された。高級絹織物輸出は世紀後半も続いたことが、他の史料からも確認されている。

ヴェネツィアをはじめとするイタリアの絹織物が、近世のオスマン帝国市場に流入したことは、オスマン帝国の絹織物産業史においても問題を喚起してきた。イタリア製絹織物は、オスマン帝国市場を独占していたわけではないが、その存在は大きく、ブルサ等オスマン帝国の地場産業に与えた影響力は無視できない。しかし第3章での分析の結果、17世紀におけるヴェネツィア商人の生糸購入の中心はシリアのアレッポであり、ブルサ生糸購入市場におけるヴェネツィアの存在は、既存研究で言及されてきたほど大きくならなかった可能性が示された。

3. 評価

本論文の特徴は、17世紀のヴェネツィア絹織物製造業とオスマン帝国市場の関係をオスマン帝国とヴェネツィア双方の史料を用いて新たな視点で分析したことにある。両史料の分析結果は、かなりの部分で符合することが確認された。17世紀前半の公定価格台帳の分析は、オスマン帝国市場で高い評価を受けるヴェネツィア製絹織物は高級品が中心であることを示す。一方でヴェネツィアの公証人文書から、ヴェネツィアからオスマン帝国市場への輸出品は、毛織物および高級絹織物が大半を占めたことが確認された。

本論文の分析により、17世紀の絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国間の取引について、これまでヴェネツィア史とオスマン帝国史に分断されてまとまった形で提示されることがなかったばらばらの像を、ある程度まとめて描き出すことができた。中世以来の地中海地域内交易は、17世紀においても、形を変えて存続していたのである。

そして、この論文でのオリジナリティの一つ、それはヴェネツィアをはじめとするイタリア製高級絹織物がオスマン帝国、特に首都イスタンブルで成功した背景に、中世のビザンツ帝国から引き継がれ、オスマン帝国とヴェネツィア共和国が共有した奢侈品消費文化の存在を指摘したことである。

確かに、これまでもイタリアの製造業者がオスマン帝国に駐在する代理人を通じて消費者の嗜好を調査し、デザインや規格をオスマン帝国市場好みに仕上げた製品を製造・販売

したことが指摘されてきた。イタリアでは奢侈品生産の産地間競争が激しく、各国政府は保護貿易政策を採用し、戦争や自国製造業の発展によりヨーロッパ市場を失ったイタリアの製造業者が、オスマン帝国市場に向かったとも考えられてきた。

しかし、それを一歩進めて、ビザンツ帝国からオスマン帝国に引き継がれた消費文化を背景に、東地中海世界に奢侈品の市場が存在したことを強く主張したのは、この論文が初めてであった。ヴェネツィアは「コンスタンティノープルの長女であり、後継者である」といわれたが、もの、ひと、かねだけではなく、文化や情報などのソフトパワーの移転をももたらした、中世から続くヴェネツィアと東地中海地域との多方面にわたる結びつきは、近世においても形を変えつつ両者の紐帯を支えていたというのである。

以上、飯田氏の論文はその必要が認められながらも、遂行に多くの困難をとまなうためこれまであまり進捗をみなかった研究テーマに果敢に取り組んだ。いうまでもなく、この論文で示された諸事実を詳しく実証するためには、さらなる資料収集と当時における奢侈品の経済史上の理論的な位置づけが必要である。このことは飯田氏自身がよく自覚している。しかし、本論文は当該テーマにおける研究の出発点としては高く評価でき、学位を請求するに相応しい水準に達している。そこで、審査委員一同は、所定の口述諮問の結果と論文評価に基づき、飯田巳貴氏が一橋大学博士（経済学）の学位を授与されるべき十分な資格を有していると判断する。

2013年4月10日

論文審査員

池 亨

大月康弘

加藤 博

斎藤寛海

城山智子